

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 220 回 日本人の魂を表現する…ルー・タバキン・ジャズコンサート

2007.9.23

先日「ルー・タバキントリオ」のジャズコンサートへ行ってきた。これがすこぶる良かった。ルー・タバキン (Lew Tabackin) は、1940 年、フィラデルフィア生まれであるから、今年で 67 歳、とてもそんな歳を感じさせない、ダイナミック溢れる演奏を聴かせてくれた。現在もニューヨークで活躍するジャズフルート、テナーサクスの一流ジャズメンとして有名だが、日本では寧ろ、ジャズピアニストの秋吉敏子の夫として知られている。

テナーサクス演奏時に曲の進行に合わせる、彼特有の、音の強弱によるヴィブラート、それに伴う体の縦の動きは、実に印象的に脳裏に焼きついている。改めて驚いたのは、彼のフルートの圧倒的「うまさ」である。

それはテーマメロディというより、インプロヴィゼーション (即興演奏、ラテン語で「アドリブ」ともいう) 時に、フルートの際立った情感が発揮されたように思われる。

アドリブは、楽譜などに依らず音楽を、即興で作曲または編曲しながら楽器演奏を行うこと。ジャズのアドリブは、その演奏によって一定のコード進行やコード理論などの規則にしたがって演奏される。さらに、フリー・ジャズとなるとほとんど規則のない演奏だと言われるが、その曲によって規則性に差が大きい。オーソドックスなスタイルのジャズで即興演奏をする奏者は一般的に、リック (よく使われる短いフレーズ) をいくつも覚えていて、曲想やひらめきなどに基づいて、知っているリックを自在に組み合わせて演奏する。でも、奏者は、本当にその場でひらめいたメロディで即興演奏をすることもしばしばある。これは一種の賭けであり、リックを使っていただけでは決してできないような新鮮なサウンドを得られる場合もあれば、さえないサウンドになってしまうこともある。それにも拘らず、こういったことをするのは、より素晴らしいサウンドを求める奏者の挑戦の現れである。本当にその場でひらめいたメロディを使うかどうか、あるいはどのくらいの量を使うかは、演奏の意味合いによって異なってくる。

アドリブこそ、ジャズの真髄かもしれない。

ルー・タバキンのアドリブのフルートは、尺八の音が鳴っていた。12 音階で作られた幾何的洋楽器であるフルートから、12 音階では表現できないはずの「日本人の魂」が響いていた。

腹の底から響いてくる、比較的大きな幅を持ったヴィブラート、半音と半音の間を隙間なく、滑らせるように流れるグリッサンド (Glissando) 奏法、叩き付けるような激しいまでのアインザッツ (Einsatz)、その後、間髪をぬって忍び寄る、妖艶なピアノシモ (Pianissimo)、これはもう、全く、尺八の世界。でも裏ではやっぱりジャズのコードが淡々と進行し、「ルー・タバキン・ジャズ・トリオ」以外の何者でもない。

何とも不可思議な、でも、心の芯からウキウキする、そんな状態に陥ったのは、自分独りではなかった様である。隣で聴いていた家内も、長男坊も、親父と同じ顔になっていた。こんな気分は、クラシックのコンサートでは体験できないのかもしれない。

クラシックもそうだが、ジャズも普段聴く機会が少なくなった。昔は東京には、幾つものジャズ喫茶があった。貧乏学生の小生ですら、新宿の「ピットイン」へは、何度となく通った覚えがある。

たまにはジャズを！…その機会を増やしていきたいものである。